ローカルワークのススメ①

# もうすぐ〝地方で就活〟がトレンドになります。

思想家 内田 樹（たつる）さん

若者の就活に、最近、新たな動きを感じとっているという内田さん。いったい、それはどんな動き？　そもそも仕事ってなに？「TURNS」読者を代表して、これからの仕事、地方、日本について、うかがってきました。

文：佐藤恵菜　写真：福田磨弥

## あまり聞かないけれど〝自給できる国ニッポン〟

日本は自給できる。あくせく働かなくても食べていける国だと、内田樹さんは言う。

「なぜなら日本ほど自然が豊かで、人にやさしい国はないですから」

内田さんは東京生まれ東京育ちの、思想界のシティーボーイだが、「日本の文化は土から生まれてきた」が持論。土とは森林、田畑、川、海、そして里山。日本には、豊かな自然環境に抱かれた風景がある。

「国土の68％が森林で、水がきれいで、海から吹く風でスモッグが滞留しない。温帯モンスーンで基本的にすごしやすい。近代化をなしとげた国で、こんな国はアジアにもヨーロッパにもありません。

けれども日本の政財界やメディアは言わないですね。この日本列島の自然環境の圧倒的な豊かさを。それどころかシンガポールと比べている。日本はいまシンガポールをモデルにしているんです。経済成長を国是とし、学校制度を見直してグローバルな人材を育てて、英語を公用語にしようとしている。シンガポールみたいに経済成長しないと世界から取り残されるぞ、日本が滅びるぞ、と財界や政界の人たちが危機感をあおる。それを一部マスメディアが喧伝する。

ウソですよ、こんなの。

水も自給できないシンガポールとは条件がまったく違います。日本は米と野菜をつくっていれば食べていける。日本は自給できる国ですよ。江戸時代に270年も鎖国できたのは島国ということもあるけど、なにより自給できたから。あくせく働かなくても、生きていけるんですよ、じつは」

食料自給率が4割にも達しないとか、エネルギー自給率が4％に過ぎないとか。私たちが知っているのは、そんな貧弱な数字である。一方で、主食の米の自給率はいまも100％だ。

「ほとんどの人が日本は自給できないと思っている。そう思い込まされているんです。自給できるとわかると、人は馬車馬のように働かなくなるから経済成長が止まる。だから経済成長を願う人たちは、日本には豊かな自然があって自給できるなんて、絶対に言わないんです。『TURNS』のように若者が農村へ移住し自給できるとなると、彼らはすごく困る（笑）。都市の労働人口が減ると賃金を上げなくてはならないからね」

## 地方の求人情報が圧倒的に足りない

若者が仕事を都市に求めてしまうのは、地方には仕事がない、と思っているからだ。実際には、地方にも田舎にも仕事はある。長年、大学で学生たちと向き合ってきた内田さんは、就職情報があまりに都市部にかたよっていることに、諸悪の根源を見いだしている。

「学生の就活に関しては、就職情報業界が完全にコントロールしています。都市部の企業に求人数よりはるかに多い学生を詰め込んで、落とす。100社にエントリーさせて100社から落とすようなシ

Vol. 8

ステムです。自分は100社受けて100社落ちるような人間だと学生の自己評価を下げさせて、劣悪な雇用条件でも受け入れざるをえないというマインドを仕込んでいく。このシステムは経済界の期待に100%応えています。若年労働者の雇用条件を低く抑え、賃金を抑えることができます」

若年労働者の雇用条件の劣化が叫ばれて久しい。いま15〜24歳の約半数、25〜35歳の4人に1人以上が非正規雇用である。

「ここまで若者の雇用条件が悪かった時代はない。都市部では食べていくのに精一杯で結婚もできない。でも、そろそろですね……」

内田さんは若い人たちの間に、就職情報業界が敷いたレールに乗らないオルタナティブな動きを感じている。地方で就活する者、農業で起業する者。

「こんな就活に見切りをつけて、オルタナティブな就活を始めた人が、いま全体の5〜6%はいると思います。ローカルのおもしろさに気づいた感度の高い人たちです。これが短期間のうちに15%ぐらいまで増える可能性があると思います。クラスメートのなかでも行動力があったり、一目置かれている人たちが地方に動きだすと影響力は大きい。あれっ、あの人たち、地方に行っちゃったけど自分はいいのか、こっちに残ってて？　と。こうなるとあとは一気ですよ。雪崩をうつようにザーッと地方へのトレンドができると思います」

最先端のUターンやUターンにつづく第二波、第三波が押し寄せる。それはいつごろ？

「近いうちに。そこで求められるのは地方の求人情報ですね。いま圧倒的に足りていません」

## 地方で働きながら考える「仕事ってなに？」

現在、内田さんは神戸市で「凱風館」という合気道の道場を主宰している。七段（公益財団法人合気会）の腕前の師範でもある。

武道は日本固有の文化であり技術だが、それも自然によってはぐくまれてきたと内田さんは言う。

「発祥は平安末期から鎌倉時代にかけて。京都の平安京は自然をシャットアウトした人工都市でした。首都が田舎の鎌倉に移行する過程で、大陸から入ってきたものがはじめて自然と融和して日本固有の文化がはぐくまれてきたんですよ。流鏑馬（やぶさめ）は馬に乗って走りながら弓を引く。すごくむずかしいと思うでしょう？　でも逆なんです。馬に乗っているから弓を引ける。武術とは自然の力を人間の身体を介して発現させる技術です。日本人は古来、そのように自然と融和しながら生きてきた。自然を克服すべきものと対峙するヨーロッパの考え方とは正反対です。

それは日本には豊かな森と水があり、人にやさしい自然があったからです。これから先100年、200年の長いスパンで国家システムを考えるなら、自然という最大のアドバンテージを生かした国づくりをすべきなんです。めざすべきはシンガポールじゃない」

グローバリズムに対置されるローカリズムへの回帰は、健全なリアクションだと内田さんはいう。

「本来、仕事を通じて達成すべきことは経済成長ではなく、自分の成長です。もっと根源的にいうと、経済活動の目的は市民社会の成熟にあります。

経済活動の目的はお金を稼ぐことではありません。もともと人は、自分たちの能力を高める仕組みとして物々交換を始めた。知らない部族と交易するためには共通の言語や通貨、契約など高度な知恵や技術が必要になる。自給自足している人間にはそんなものは必要ない。交易しないよりしたほうが成長できることを知って、人は経済活動を発達させていったんです。それがいま、経済活動のために人は成長をめざしている。それがあたり前になっているのが問題です。

仕事のほんとうの価値はインヴィジブルアセッツ（見えざる資産）にあります。仕事をすることで生命力が高まったり、知見が広がったり、人と知り合えたりする。仕事を通じて自分がどれだけ豊かになれるか。そうした見えない価値を基準に職業を選択してほしい」

都市を離れて地方へ向かう人たちは、見えない価値に気づいた人たちなのかもしれない。けれど行った先の土地になじめるか、仕事はあるかなど、地方には地方なりの悩みがつきまとう。それでも、と内田さんはいう。それこそが都市を離れるよさであると。

「群れを離れると、〝仕事ってなんだろう？〟という根源的な問題に突きあたる。労働ってなんだ、経済ってなんだ？　人が群れを離れて違うことを始める、そのいちばんの効用は〝オレはなにをやっているのか〟を、とことん突き詰めて考えることだと思います」

地方で働く。お金のためではなく、自分の成長のために働く。

「真剣に考えて仕事が見つからなくても、田舎には食べるものはある。大丈夫、生きていけるから」

地方へ行って、とことん考えてみたい。「仕事ってなに？」

### 内田さんセレクト！

**TURNS読者にオススメの本**

『日本的霊性』（鈴木大拙著／岩波書店）「日本人の精神性が自然にいかにはぐくまれてき


**うちだ・たつる**

1950年、東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。神戸女学院大学名誉教授。専門はフランス現代思想、映画論、武道論と幅広い、現代日本の〝インテリおじさん〟。著書に、日本人とはなにものかを多様な視点でまとめた『日本辺境論』（新潮社）、中沢新一氏と日本の思想と価値観を根掘り葉掘り語り合った共著『日本の文脈』（角川書店）、有名無名のリベラルな人々と日本の未来を語った『脱グローバ